

チベット問題ってなに？

チベットってどこのこと？(1)

チベット(Tibet:他称)という言葉の由来

チベット人は自分の国をbod(プー)と呼ぶ。(チベット人が“プーギャロ！”と叫ぶが、これは「チベットに勝利を！」という意味)

美称としてKha ba can (カワチェン,カンジョン,雪の国の意)なども使われる。この国を、唐の時代の中国人は吐蕃(とばん)と、中央アジアの商人ソグド人、遊牧のトルコ人、イスラム教徒はTubbatなどと呼んだ。

これが近代ヨーロッパの言語、例えば英語のTibetとなった。

西藏とは

現在使われる漢語(中国語)の西藏(シーツァン)は、多くは現代中国による支配でつくられた「西藏自治区」(チベット自治区、チベット人がウ・ツァンと呼ぶ地域)を指して用いられる。

つまり、チベット人がプーと呼ぶ地域と、漢民族が西藏と呼ぶ地域では、含む範囲が違う。

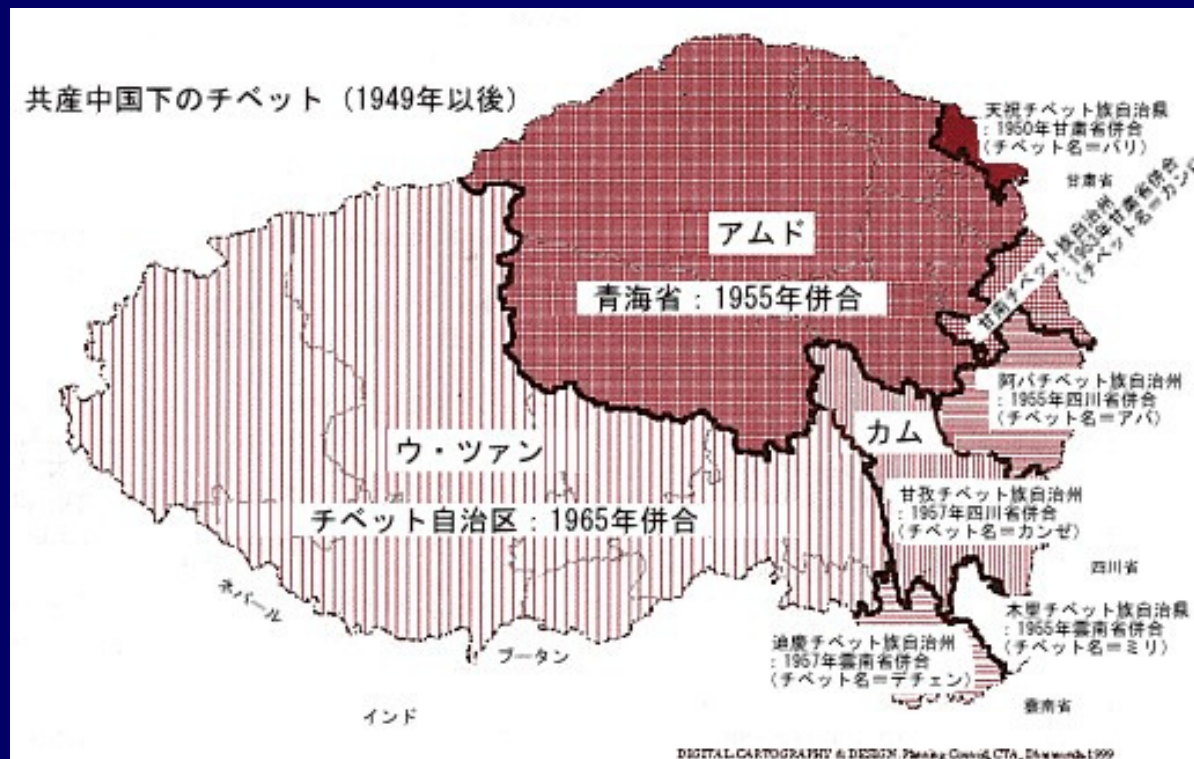
また、現時点では、チベットという独立国はない。



チベットってどこのこと？(2)

チベット亡命政府(正式名称は中央チベット行政府。元首はダライ・ラマ14世)が定義するチベット(ウ・ツァン、アムド、カム)と、中国共産党が主張する西藏自治区は範囲が異なる。

- ・ ウ・ツァン(中心的地域、ラサ、シガツェなどを含む)、ガリ(西部)、
チャンタン高原(北部)＝西藏(チベット)自治区
 - ・ アムド(東北部)＝青海省
 - ・ カム(東部)＝四川省の一部、甘肅省の一部、雲南省の一部
- “Free Tibet”というときのTibetはウ・ツァン、アムド、カムを指す。



ダライ・ラマ法王庁日本代表部(チベットハウス)のホームページからの転載

チベットってどこのこと？(3)

チベット以外の地域にも、チベット仏教を通してチベット文化は広がっており、この地域をチベット仏教文化圏と呼ぶ。

【チベット仏教文化圏】

(チベット)

ウ・ツァン、アムド、カム

(チベット周辺)

インド：北部(ラダックなど)

東部(シッキムなど)

ネパール：北部(ムスタンなど)

ブータン：チベット仏教の一宗派を
国教とする唯一の独立国

(モンゴル周辺)

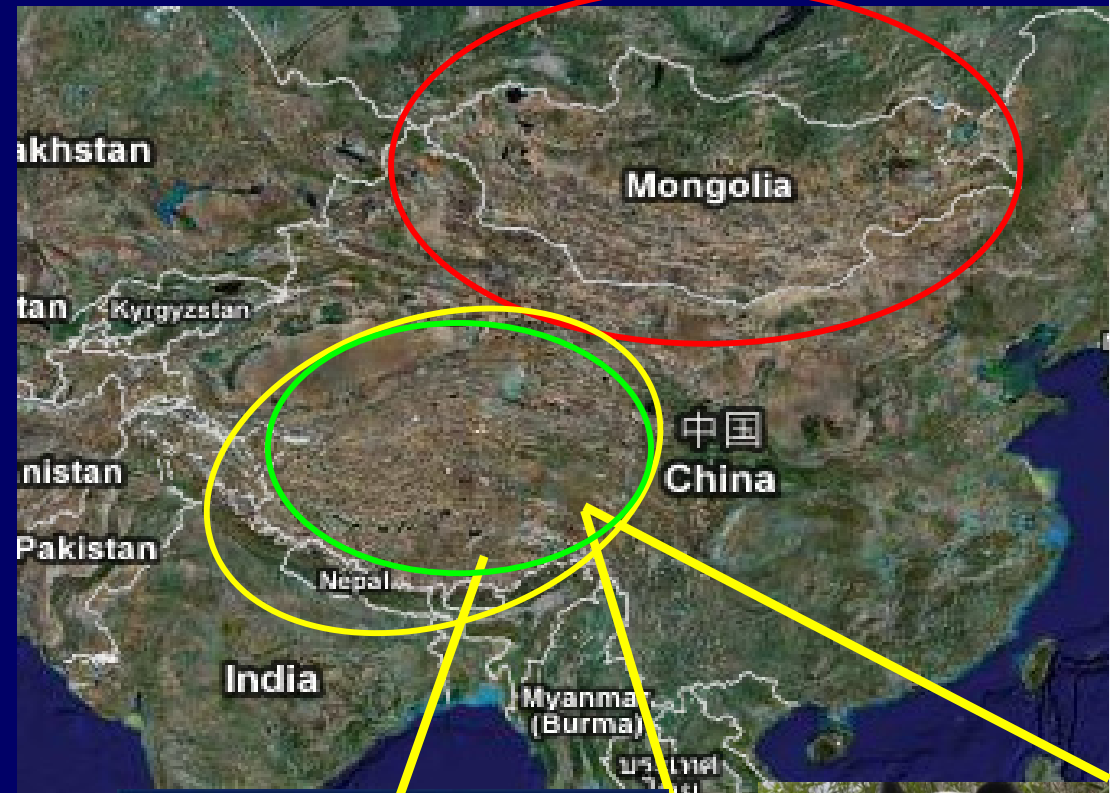
モンゴル(北モンゴル＝外モンゴル)

中国の占領地域：内蒙古自治区
(南モンゴル＝内モンゴル)
(モンゴル人は南北、
中国人は内外に分ける)

ロシア：ブリヤート、トゥヴァ

(モンゴルに隣接する地域)

Google Map



チベットと日本の関係(1)

密教(大乘仏教の一部)が生きている国

密教化した仏教が生きているのはチベットと日本だけ。
チベット仏教研究では日本は世界最先端にある。

第二次大戦中の中立国としてのチベット

第二次大戦中、チベットは中立を保った。イギリスが中華民国を支援するため、インド→チベット→中国大陸というルートを模索したが、鎖国していたチベットは中立を保つためにそれを断り、英中は手が出せなかった。

しかし、第二次大戦後、中国共産党はこれを口実に、チベットは日本に協力したと位置づけ非難した。

日本にいるチベット亡命者の数は？

チベット亡命政府が把握しているだけで60人前後。先進国の中では少ない。
しかし、中国国籍で中国人に分類されているチベット人が多数いるため実数は不明で、おそらく合計で100人程度ではないかと考えられる。

日本をニホンと呼ぶ??

チベット人は日本の国名をニホンと呼ぶことがある。
ニホンはチベット語で「日の昇るところ」という意味。

チベットと日本の関係(2)

ヒマラヤを越えてチベット仏教を学んだ日本人達

19世紀前半、チベットは鎖国していた

明治以降、欧州風の文献に基づく仏教研究が日本で始まる

→ サンスクリット語、チベット語仏典の必要性が増す。

日本人僧侶たちのチベット熱

→ インドでチベット語を習得、チベット人に扮装、
顔立ちが似ているため入国に成功したものもいた。
一方、志半ばで異国で客死するものもいた。

河口慧海(黄檗宗):

欧米に先駆けてチベットに密入国

多田等観(浄土真宗):

13世法王から修行を許される
ゲシェ(仏教博士)の称号を得る
チベット大蔵経を日本に伝えた

彼らの残した旅行記などは、鎖国当時のチベットの生活を知るための貴重な資料となっている。



チベット史に登場する重要人物・制度・国

【ダライ・ラマ法王猊下(げいか)】

チベットの宗教と政治の最高指導者の称号。

チベット人の高僧ソナム・ギャツォ(デプン寺の転生ラマ)がモンゴルで布教した際、アルタン・ハンに「法王・大梵天」という称号を贈り、「ダライ(モンゴル語で大海)ラマ(チベット語で上師)」という称号を贈られたのが始まり。中国の皇帝が家臣に与えた称号ではない。ソナム・ギャツォは自らを「ダライ・ラマ3世」とし、さかのぼって過去の転生ラマをダライ・ラマ1,2世とした。

ダライ・ラマ5世(17世紀中頃)からは宗教と政治の両権力を握るチベットの元首となる。13世はチベット独立を宣言した。現在は14世テンジン・ギャツォ。

転生ラマ制度によって選ばれ、観音菩薩の化身であると考えられている。ダライ・ラマの生まれ変わりは、先代の遺言を基にチベット人が探した。複数の候補者がいた場合、くじ引きの場合もあった。清朝はそれらの結果を承認するのみであった。

【パンチェン・ラマ猊下】

チベット仏教第二位の地位。

ダライ・ラマ5世が自分の師に「パンチェン(大学者)ラマ」という称号を贈ったのが始まり。(パンチェン・ラマには数え方が2種類ある。本文中ではチベットでの一般的な数え方の後に、タシルンポ僧院の数え方を括弧で示す。中国は後者を採用している。)

パンチェン・ラマ6(9)世の時にダライ・ラマ政権との対立が表面化し、中華民国に出国。

パンチェン・ラマ7(10)世は中国共産党からチベット人を擁護したため対立は解消した。

ダライ・ラマ14世の選定した現在のパンチェン・ラマ8(11)世は6歳の時に中国共産党に拉致され、現在も行方不明である。中国共産党は別の少年を独自に認定し、パンチェン・ラマ11世としている。(パンチェン・ラマ問題)

チベット史に登場する重要人物・制度・国

【チベット人とモンゴル人・満州族との間の「僧侶と施主」(チューユン)関係】

チベットを僧侶や教団、元朝や清朝の皇帝を施主と考え、互いに支え合う特殊な対等関係。

元朝(モンゴル人)や清朝(満州族)では、中央アジアの平和・軍事的な争いの回避に役立った。特に清朝の初期～中期では、清朝がチベットを守ることで、周辺のチベット仏教国に対し清朝を権威付けた。しかし、清朝末期、清朝がチベットを支配する主従関係と清朝が読み替えようとしたため、現代の「チベット問題」の淵源のひとつとなる。

【中華民国】

1911-1912年に清朝を辛亥革命で滅ぼした漢民族国家。

チベットを自らの領土とみなしたが、チベットに対する影響力はなかった。

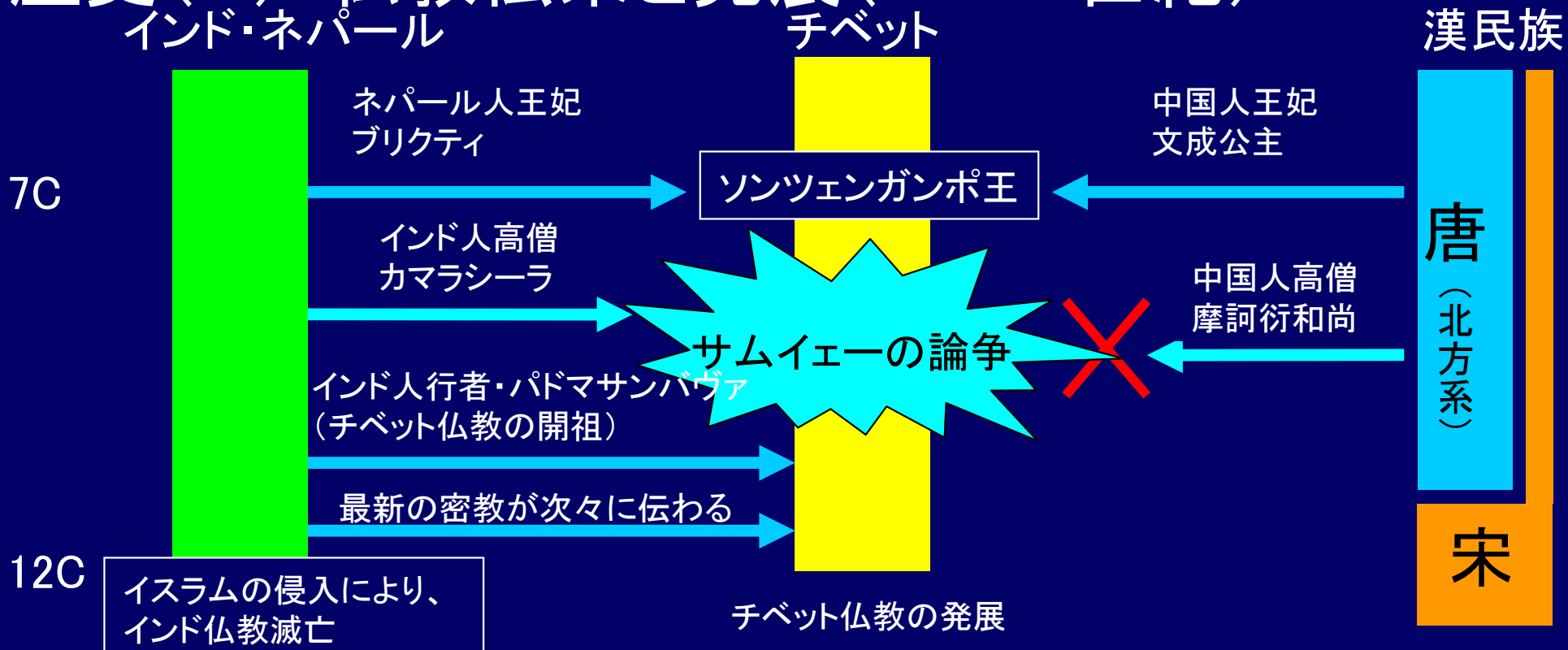
第二次大戦後、中国共産党との内戦に破れ台湾に逃れた。

【中華人民共和国】

1950年に人民解放軍の軍事侵攻によってチベットを侵略した。

チベットを「中国の不可分の一部」に組み込み、チベット民族に自己決定権(民族自決権)を与えず、「チベット問題」が起こった。1959年にはダライ・ラマ14世がインドに亡命し、チベット政府が消滅した。

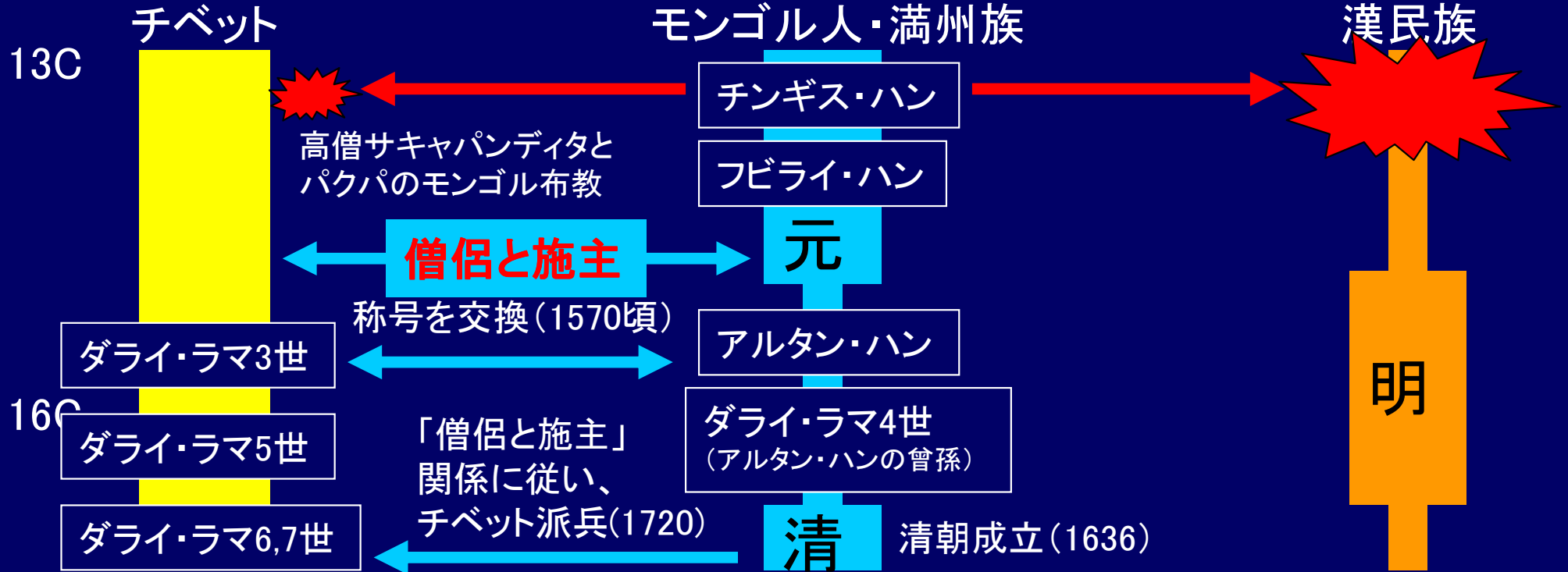
歴史(1): 仏教伝来と発展(7-12世紀)



7世紀にチベットに初の統一国家が誕生し、一時は唐の長安を軍事支配した。ソンツェンガンポ王がネパールと中国から王妃を迎えた。やがてインド仏教と中国仏教がチベットに伝わった。その後サムイェー寺で両仏教の代表者が討論し、インド仏教が勝利、チベットはインド仏教の正当な継承者となり、インドからさまざまな仏教経典が伝わった。

12世紀にインド仏教が滅びると、独自のチベット仏教が発展し、以来チベット文化の中心となり、インド文明や中国文明とは異なる独自のチベット文明が形成され、原理的に軍事力(軍隊)をほとんど持たない国家を作り上げる。

歴史(2): モンゴルとダライ・ラマ法王(13-19世紀)

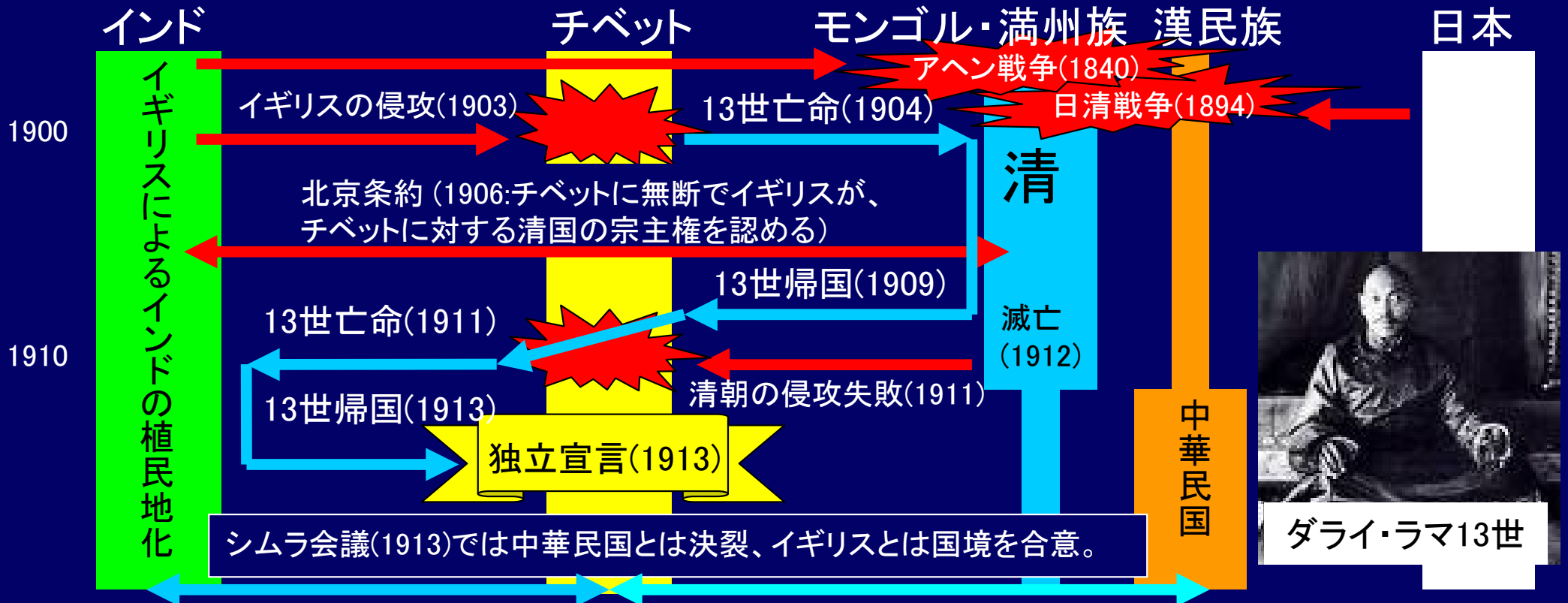


13世紀、モンゴルが拡大し、漢民族は衰退した。チベット人は仏教をモンゴル人に布教してチベット仏教文化圏を形成し、「仏教に従った政治を行う理想の王権像」が両者で共有され、「僧侶と施主(チューユン)」という特殊な対等関係を作ることになった。この関係は、元朝から明朝、モンゴル系の満州族の清朝にも引き継がれた。

16世紀、モンゴルのアルタン・ハンとチベット高僧の間で称号が交換され、「ダライ・ラマ」という称号が贈られた。ダライ・ラマ4世はモンゴル人として転生した。ダライ・ラマ5世は、宗教だけでなくチベット国内の政治も支配し、ダライ・ラマ政権が完成した。

ダライ・ラマ6・7世の時、政治混乱が起こった。ダライ・ラマ7世を支援するため「僧侶と施主」関係に従い清朝が1720年に派兵した。中国共産党はこれを中国によるチベット征服とするが、モンゴルの一部族からダライ・ラマを守るための軍事支援であり、実際にはチベット人による自治は変わることはなかった。

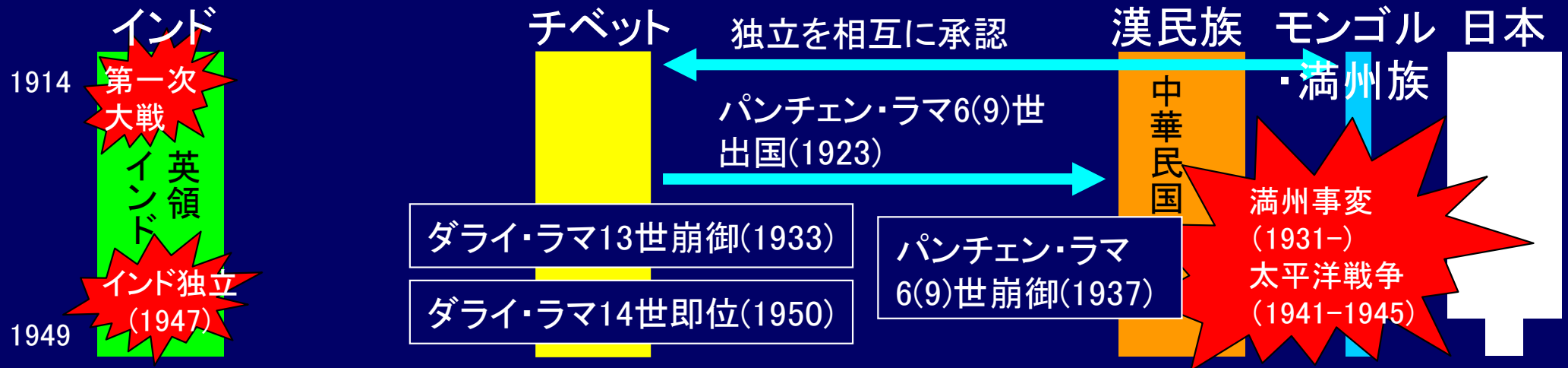
歴史(3): 英・清の侵攻と独立(1903-1914)



20世紀初頭、イギリスの北進、ロシアの南進によって、清朝は国益を守るためにチベット高原への領土的な干渉を始めた。チベットがこれらに反発したため、イギリス軍が1903年にチベットに軍事侵攻、ダライ・ラマ13世はモンゴル、清に亡命した。清朝末期の植民地化の混乱を13世はその目で目撃し、「僧侶と施主」関係を「宗主国＝清、従属国＝チベット」と清朝が読み替えようとしたため、13世は清朝を見切り帰国した(1909)。しかし、今度は清朝がチベットに軍事侵攻(1911)したため、13世は英領インドに再度亡命。1912年に清朝が崩壊し、翌年13世は再帰国、清朝との「僧侶と施主」の関係を破棄し、「独立宣言と五か条の新政策」を交付し、近代化に着手した。

1913年、シムラ会議でチベットは主権を、中華民国は宗主権を主張するが決裂した。英領インドとチベットは国境を合意した(マクマホンライン:シムラ条約1914年)。

歴史(4): 事実上の独立状態と鎖国(1914-1949)



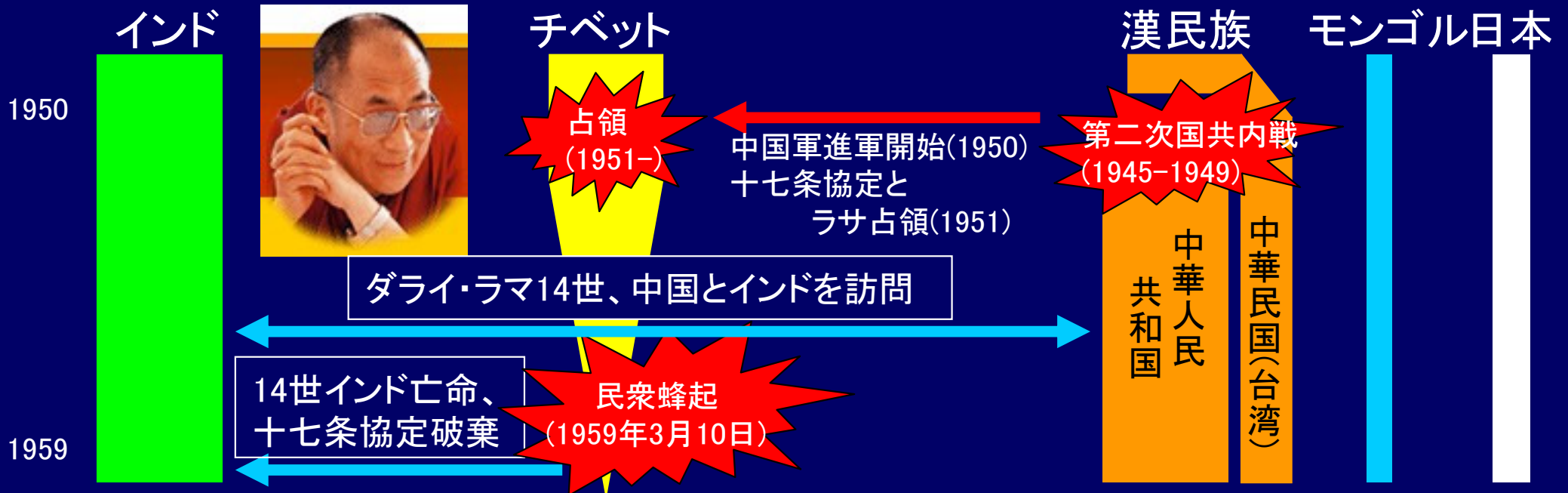
チベットの独立は綱渡り状態であった。チベット独立を公式に承認したのはモンゴルだけであり、イギリス・ロシア・中華民国からは無視された。

ダライ・ラマ13世の亡命期にパンチェン・ラマ6(9)世は政治権力を増したが、ダライ・ラマの帰国後、政争によりパンチェン・ラマ6(9)世が中華民国に出国(1923)、その地で崩御した(1937)。1933年にはダライ・ラマ13世も崩御。その後1950年まで、ダライ・ラマとパンチェン・ラマの両者がチベット国内で不在となり、摂政による政争が続いた。

中華民国はチベット独立を認めていなかったが、日本と欧米列強の侵略、中国での内戦(国共内戦)に全力を注がざるを得なかったため、蒙蔵委員会駐蔵弁事所(代表事務所)をラサに強引に置くことに留まり、チベットに干渉できなかった。イギリスも第一次大戦(1914-1917)、第二次大戦、インド独立(1947)の対応に注力し、チベットには関心がなくなっていた。その結果、チベットは軍隊がほとんどないにもかかわらず、清朝崩壊以降、鎖国状態のまま、事実上の独立を保つことが出来た。

チベットに潜入した日本人仏教僧などの努力により、当時の一般庶民の生活が伝えられている。混乱した古い政治体制ではあったものの、厳しい自然環境に適応したチベット民衆は、自給自足の平和な生活を過ごしていた。

歴史(5): 中国共産党の侵略(1950-1959)



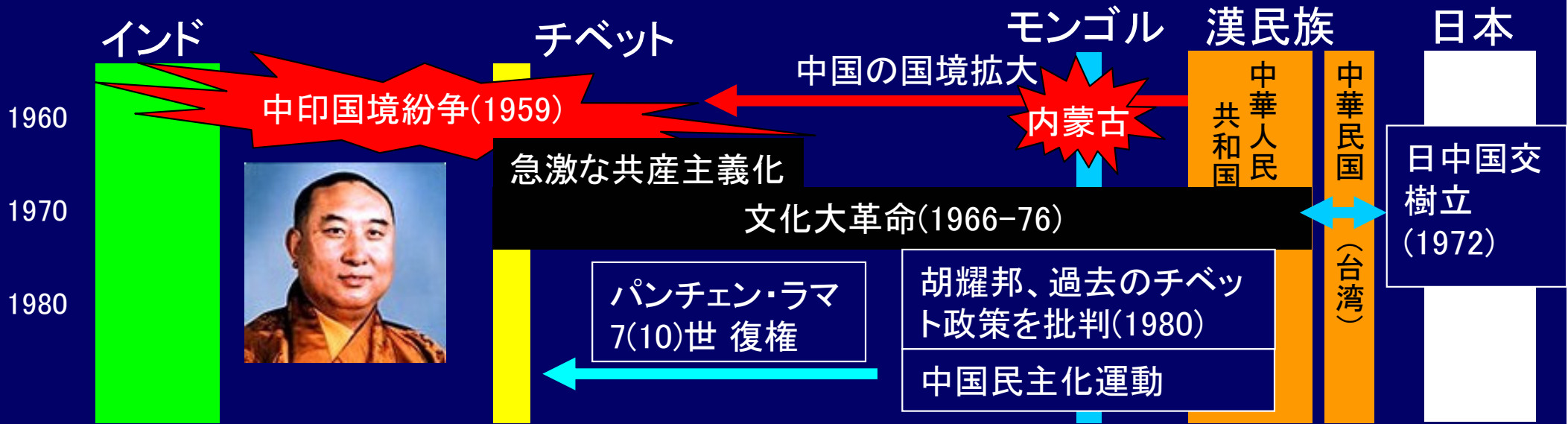
第2次大戦後のアジアの勢力図の変化により、チベットの独立状態は突然壊された。

1949年、内戦に勝利した毛沢東が率いる中国共産党がチベット侵攻を開始、中国人民解放軍(以下中国軍)が国境に達し、軍事力を背景に十七条協定を強要した。その中で、チベットの自治を認める代わりに軍事と外交は中国が行う事が取り決められ、それを口実に中国軍がラサを占領。しかし、チベット人による自治は行われず、圧倒的な中国軍に対しチベット各地でゲリラ的な戦闘と流血が繰り返された。

このような混乱の中、ダライ・ラマ14世は1950年に15歳で即位、中国による侵略を国連に訴え(1950)、中国(1954)、インド(1956)を訪問したが効果はなく、イギリスの協力も得られなかった。

1959年、中国軍はダライ・ラマ14世に一人で基地に観劇に来るよう迫り、拉致を予感したチベット民衆がラサで3月10日に蜂起(チベット民衆蜂起記念日)、これ以上の流血を避けるために14世はインドに亡命した。

歴史(6): 共産党侵略後(1959-1980中頃)



ダライ・ラマ14世はチベット亡命政府をインドで樹立、チベット問題の解決に乗り出した。一方、中国はチベット・インド国境(シムラ条約1914年:マクマホンライン)をも認めず、インドに侵攻したため中印関係が悪化した(中印国境紛争:1959)。

中国共産党は僧尼の力をそぐため、拷問虐殺、寺院の破壊を組織的に行った。また、急激に共産主義的な農業を導入したため、生産力が落ち飢餓が発生した。共産党による侵略開始後(1950年代中頃)から文化大革命末までこのような行為が行われ、チベット亡命政府発表では120万人のチベット人が死亡した。

文化大革命後の1980年、胡耀邦総書記は過去のチベット政策の失敗を謝罪し中国人官僚を批判するが、1987年に失脚した。

また、チベット人を懐柔するため、過去にダライ・ラマ政権と対立していたパンチェン・ラマを政治的に利用しようとして、パンチェン・ラマ7(10)世を復権させた。

歴史(7): 高度な自治とノーベル平和賞(1987-2008)

インド

チベット

漢民族

日本

1987

ダライ・ラマ14世
五項目提案(1987)
ストラスブール提案(1988)
ノーベル平和賞受賞(1989)

パンチェン・ラマ7(10)世の
共産党批判と崩御(1989)

民主化運動

中華人民共和国

中華民国(台湾)

1989

胡錦濤のラサ武力弾圧(1989)
天安門事件(1989)

ダライ・ラマ14世は、チベットの非軍事化・非核化・民主化・漢民族の移住停止・対話再開を提案(五項目提案:1987、アメリカ)し、中国の一部としての自治を提案(ストラスブール提案:1988、フランス)した。これ以来、チベット亡命政府は独立を主張せず、「高度な自治」を主張している。

1989年1月、パンチェン・ラマ7(10)世はラサで共産党を批判、数日後に急死した。(これにより、これまでのダライ・ラマとパンチェン・ラマの関係は明確に修復された)

同年3月、ラサで民衆蜂起30周年デモが発生し、胡錦濤(当時は西藏自治区共産党書記、後に国家主席)が武力弾圧した。同年4月、民主化に寛容であった胡耀邦元総書記の追悼集会在拡大し、中国民主化運動は最大の盛り上がりを見せた。しかし、同年6月、天安門広場に集まった中国人学生を中国軍が武力弾圧した(天安門事件:1989)。

このような苦境の中、ダライ・ラマ14世は仏教の非暴力の教えに基づく対話による解決策を模索し、その功績により1989年ノーベル平和賞を受賞した。

2008年3月、僧侶によるデモがラサで発生、武力弾圧が起こりラサの民衆が暴徒化、デモと弾圧がチベット全土・世界各国に飛び火した。北京オリンピックを前に人権問題を改善すると約束した胡錦濤政権への批判が世界中で巻き起った。しかし、逆に世界各国の華僑が北京オリンピック支持とチベット人への弾圧を正当化するデモを行ない、中国ナショナリズムの台頭が露見した。弾圧はまだ続いている...

ポイント(1)チベット問題の淵源

1949年以前に漢民族がチベットを支配したことはなかった

- ・唐(厳密には漢民族ではない)と姻戚関係はあったが従属国ではなかった。
- ・宋朝や明朝とは、朝貢を通じた貿易以外はほとんど交流がなかった。

元朝(モンゴル人)・清朝(満州族)とチベット人との関係

- ・「僧侶と施主」(チューユン)という特殊な対等関係。1900年以前の両国関係は良好
- ・清朝を築いた満州族はチベット仏教を信仰し、チベットを敬っていた。
また、チベットを保護することで、周辺国からの信頼を得ていた。
- ・清朝がアヘン戦争や日清戦争に敗れて植民地支配されていく中で、
文明化した清が宗主国となり、未開の従属国であるチベットを支配する
という考え方が清朝内で台頭してきた。

しかし、宗主国・従属国という近代的な概念を当てはめるのは不可能だった。

1913-1949年の間、チベットは中華民国から事実上独立していた

- ・「僧侶と施主」の関係は、もはやチベット人と漢民族との間には成立しないとチベット人は考える。
- ・中華民国は宗主権を主張していたが、実際には何の影響力もなかった。
- ・事実上の独立状態であったことは国連の報告でも認められている。

ダライ・ラマ13世崩御(1933)と14世即位(1950)の間の政治的空白期間

- ・第二次大戦などで世界が大きく動いていたにもかかわらず、
チベットでは軍事整備、国連加盟などの努力が不十分であった。
- ・ほとんどのアジアの国が第二次大戦までに植民地化された中、チベットは
鎖国という方法で事実上の独立を保っており、チベットが遅れていたと
単純に非難することは難しい。

ポイント(2)チベット問題の発端

1950年の中国共産党の主張と侵略の不当性

- ・チベットをイギリス帝国主義から解放すると宣言したが、シムラ条約(1914)以降のチベットはイギリスの影響下にはなかった。
- ・封建領主からの農奴の解放を主張したが、ダライ・ラマ政権は古い政治体制ではあったものの、解放が必要な暗黒社会ではなかった。
当時の目撃証人として中国人の官僚や欧米人の発言がある。
- ・チベットからの要請で出兵したと主張するが、十七条協定(1951)は中国軍の出兵(1950)の後に結ばれた。軍事力を背景に結ばれた協定には効力がない。
- ・現在のチベットでは十七条協定にある「自治」すら認められていない。

イギリス、インド、ロシア(ソ連)の態度(1900~1959)

- ・これらの国々は、清・中国との交渉を有利にするため、清・中国と条約を結ぶ際にはチベットを従属国として扱った。
- ・しかし、チベットを国境の緩衝地帯とするため、国連やチベットに対しては帰属を明確にすることを避けた。
- ・このあいまいな態度により、1913年のシムラ条約、1950年の共産党の侵略、1959年のダライ・ラマ14世亡命などの重要な場面で結論が先送りにされ、チベット問題が長期化した一因になった。

ポイント(3) 民衆の視点

現在のチベット人は、ほとんどが1913年の独立宣言以後に生まれた

- ・独立宣言前のチベットを実体験として知るチベット人はほとんどいない。
- ・民衆の実体験としては、独立時代(1913-1950)、中国共産党の侵略による混乱(1950-59)、中国に支配された時代(1960-現在)、およびインド・ネパールなど外国での亡命生活(1960-現在)、に限られる。
- ・独立時代、チベット内外は激動の時代であったが、民衆はそれらとは全く無縁であり、自給自足の質素で平和な生活を過ごしていた。チベット亡命者の手記の中では、この頃を懐かしがる記述が多い。
- ・それとは対照的に、共産党の侵略以降は共産主義思想教育、宗教弾圧、拷問、亡命生活の苦労など、民衆の過酷な体験が語られることが多い。

チベット人が本当にほしいこと

- ・中国共産党の侵略を肯定する文章では、近年の物質的な豊かさを強調する傾向にある。しかし、亡命チベット人の多くが「私達は鉄道や道路がほしいとは言っていない。自由で平和な暮らしがほしいだけだ」と主張している。

民衆と宗教の関係

- ・ダライ・ラマ政権では仏教に従った政教一致の政治を行っており、1950年当時の多くのチベット民衆はそれを歓迎していた。
- ・それに対し、共産主義は宗教は毒であると考えているため、僧尼への弾圧が激しくなり、民衆への思想教育を徹底した。
- ・寺院・僧尼に対する共産党の無礼さは民衆の感情を非常に害している。
- ・共産党が僧尼の生活を妨害→僧侶がデモ→共産党が武力弾圧→民衆が蜂起→武力弾圧が拡大、
という図式は1950年以降何度も繰り返され、今でも続いている。

現代のチベット問題(1)

**チベット問題は、単なる歴史認識の問題ではない！
今なおチベット本土でチベット人は虐げられ、亡命者は増えている！**

チベット問題は中国の内政問題か？

人権問題、宗教・教育の自由の侵害は、内政かどうかには関係ない。
亡命政府は中国の一部として高度な自治を行うことを主張しているが、
チベット本土ではチベット人による民主的な自治は行われていない。
チベット民衆の中には独立を望む声も強い。

人権問題

僧尼や政治犯への拷問や処刑、農政失敗による飢餓などで
累計120万人が死亡(亡命政府調べ)。各家庭で誰か一人は犠牲になっている。
強制移住(例:遊牧民から家畜を取り上げて都市や農村に定住させる)

宗教の自由

宗教的な活動(法王への祈りなど)をしても政治犯として逮捕される。
法王を批判することを強要され、断ると政治犯扱いされる。
パンチェン・ラマ8(11)世を共産党が拉致(世界最年少の政治囚)
別の少年をパンチェン・ラマ11世として擁立(パンチェン・ラマ問題)
ダライ・ラマ後継者問題:転生ラマを共産党に届け出る制度を強要。
僧侶に還俗を強要する。



パンチェン・ラマ8(11)世

教育の自由

中国語を用いた共産主義教育の失敗。
チベット語が公用語ではなく、チベット文化教育も行われていない。

現代のチベット問題(2)

人口問題・環境問題 (数字は1997年、チベット人権民主センターの推計)

元々チベットの人口は600万人程度。飢餓もなかった。

中国共産党の漢民族移住政策

チベット全体(ウ・ツァン、アムド、カム)に750万人の中国人が移住。

食料や建築材料を現地調達。森林破壊、遊牧地の耕地化の失敗、飢餓発生

チベット高原の軍事利用・資源開発

インド・ロシア・中東との緩衝地帯

核兵器の基地、軍事基地としてチベットを利用

鉱物資源、エネルギー資源、核資源がチベット高原に眠っている。

青蔵鉄道

アムド(青海省)とウ・ツァン(西蔵自治区)を縦断する鉄道の開通で、

人口問題・資源開発・軍事利用がさらに加速する可能性がある。

民族問題

中国共産党は多民族国家であるという建前を重視(実際には9割が漢民族)

東トルキスタン(新疆ウイグル自治区)、南モンゴル(内モンゴル自治区)

などの民族問題がある。

台湾問題では漢民族自体が2つに分かれる可能性がある。

中国共産党はチベットに妥協的な態度はとれない。

国連の役割

中国は常任理事国だが、チベットは国と認められていないため国連に入れない。

国連の報告書では、チベットは事実上独立していたことを認めている。

中国の侵略に対しては、国連非難決議を出しているものの、

国連はチベット問題を解決するための行動は取っていない。

今、我々にできること

チベット問題を知ること:少なくとも忘れないで!

15万人のチベット難民、600万人のチベット人が今も苦しんでいる。
1950年から半世紀以上も続いている。一時的な問題でない。

あきらめない

ダライ・ラマ13世は2度の亡命から帰国し、1913年に独立を宣言した。
胡耀邦総書記時代、共産党の態度が軟化した。今でも対話は続いている。
多くの植民地は独立した。チベットは最後で最大の植民地問題でもある。
多くの共産主義国は民主化せざるをえなかった。中国もいずれ変わる。

チベット人を支援する

チベット難民は国籍もなく孤立しがち。
チベット人を支援する声だけでも、チベット人は勇気づけられる。
チベットハウスなどのチベット人団体を支援する。
Tibet Support Network Japan (TSNJ)などの日本人団体を支援する。
人権団体の署名活動や投書活動に参加する。

平和的、非暴力的な方法を貫く

ダライ・ラマ政権成立(17世紀)以降、チベットは一貫して平和外交を展開。
チベット問題が国際的に評価されているのは、非暴力的であるため。
暴力的な行動では、今のような支援は得られない。

気をつけること:自分でよく考えて行動する。デマに流されない。

反共産主義・反中国が目的ではなく、チベット問題の解決が目的。
チベット問題を悪用して自分たちの意見を押し付ける人もいる。

ヒマラヤを越える子供たち

中国の圧政に苦しんだチベット人15万人が、かつてヒマラヤを越えて亡命した。チベット人達は人間として当然の権利、言論の自由、宗教の自由、教育の自由を今も求めている。

中国共産党は、共産主義的な教育をチベットで行っている。そのため、チベットの文化・歴史・言語を子供たちは学べない。

子供たちに自分たちの文化を学ばせるため、チベット人は子供たちを亡命させる。中国からヒマラヤを越える子供たちは、年間で数十～数百人を数える。

しかし今、中国人民解放軍は国境の警備を強化し、抑圧から逃れようとするチベット人たちを国境で拘束している。幸運にもヒマラヤを越えることが出来た子供たちは、未来のために異国でチベット文化を学んでいる。

ヒマラヤを越える子供たち

ヒマラヤを越えることは

昔も今も命懸けである。

命を懸けてでも伝えたいこと

守りたいものがあるからこそ

ヒマラヤを越えるのである。

しかし、守り伝えたいものは

実はあたりまえのことである。

自由に生きたい、ただそれだけである。

自由に生きたい、

ただそれだけを伝えるために

命を懸けなくてもよい世界を作る、

その普遍的責任が我々にはある。

文責:みよし

このパネルを作る際に使用した参考文献

ダライ・ラマ法王庁日本代表部(チベットハウス)のHP
チベット入門(チベット亡命政府情報・国際関係省著、鳥影社)
14人のダライ・ラマ(G.H.ムリン著、田崎國彦他訳、春秋社)
チベット文化史(D.スネルグローヴ他著、奥山直司訳、春秋社)
ダライ・ラマ自伝(ダライ・ラマ著、山際素男訳、文春文庫)
チベットを知るための50章(石濱裕美子編集、明石書店)
雪の下の炎(パルデン・ギャツォ著、檜垣嗣子訳、新潮社)
チベット入門(ペマ・ギャルポ著、中日出版)

チベット関連の映画

「クンドゥン」、「セブンイヤーズインチベット」、「ザ カップ」、
「モウモ チェンガ」、「チベットチベット」、「地球交響曲第二番」、
「ヒマラヤを越える子供たち」など

チベットサポーターのHome Page

Tibet Support Network Japan (TSNJ):チベット支援団体ネットワーク
Save Tibet Network (STN): 2008年に作られた個人参加ネットワーク
Student for a Free Tibet (SFT) 日本: アピール、アクションを行う団体
チベットNOW@ルンタ: インド・ダラムサラからの最新情報を翻訳
Ali-Kali: チベットハウスでチベット語を学んでいた人達のHP
(I Love Tibet、チベット式、うるるんたなどの老舗有名サイトは割愛しました。)

このパネルを作成した団体

チベットサポートグループKIKU (<http://www.tsg-kiku.com>)
インド・ダラムサラのチベット子供村をサポートしています。

田崎氏、渡邊氏、
クンチョク氏には
特別にご協力いただきました。
ありがとうございました。